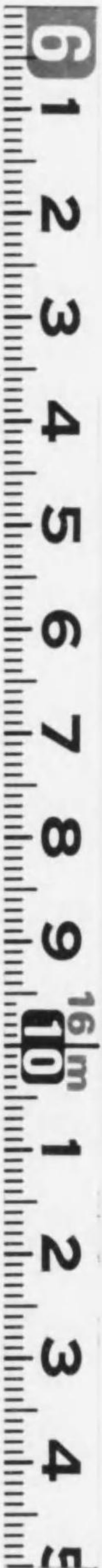


一茶はうたふ

前澤淵月著

特 235

472



始



特235
472

ふたらは茶一

著月淵澤前



版院書村山

はしがき

或る年の暮、出来上つて来た梟の標本を床の間に飾つて

梟の のほんどころか 年の暮

と、くり返し口ずさんでゐると、七つになる女の子が、それは何の事かとさく。わけを話したついでに、この句の作者一茶の俳句中、思ひ出すまゝに、わかりよささうなのを幾つか例にあげて俳句のあらましを聞かせました。

『ぢやあ俳句は、五・七・五と字数をそろへればいいの？』

『まあ〜、さう言つたやうなものだ。』
と、手つとり早くかたつけておいたのです。

さうかうして居るうちに半月は過ぎました。一寸その子の日記を開いてみると

一月十六日

ユキガフル

カサモササズニ

ガクカウヘ

ユキガフル

マントモキズニ

ガクカウヘ

一月十七日

ブランコデ オチテモナカズ マタノツタ
オソナヘノ 上カラドタリ ミカンカナ

と、やつてゐるではありませんか。これは捨ててはおかれない。一つ此の機会に……やはり手頃な作品に親しませるに限る。と考へて、一茶の句集から、伊呂波と拾ひ出し、「歌留多」にして與へたのも、もう十餘年の昔です。

その後、一茶の遺稿も段々掘り出されて來たので、それを手にして、心づくまゝに拾ひなほして纏めてみました。

一茶の句といつても、今までに世に出たものが、ざつと二萬はあるのですから驚きます。その多くが「これは一茶の句」といふ特色を見せ、自分の生活を何のこたはりもなくすらくと表はし子供に對しては深い親しみを持たせ、知らず／＼自然に對する純な愛をはぐくんでくれるのですから、全く感心しないでは居られません。

此處に拾ひあげたのは、いろは四十七句を主として、ちよつと手びきに添書きしたのを合はせると八十餘句あります。これを二萬にくらべては、ほんのわづかですけれど、玉の中の玉を選んだものですから、その句をとほして、これを讀む幼い人々と一茶との交はりは十分遂げら

れませう。これが遂げられた時、純な子供心がうるはされ増かはれてゆくのです。それは子供に限る事ではありません。

斯う考へてゐるうちに、興が湧いて來て、「一茶はうたふ」の一篇が生まれました。ちやうど一茶の總く／＼ともなりますから、それを加へ此の小冊子の名と決めました。

大體此の稿が出来上つてゐたのは二三年前の事でした。それを今年になつて再び取り出して筆を入れ、「どうだらう」とお友達にきいて又改め、「かはい、子には旅をさせよ」の心遣ひで、若葉の頃から落葉するまで、勝峰（晋風）先生、巖谷（小波）先生、相馬（御風）先生、鳥崎（藤村）先生と御手を煩はし、戻つてやうやく一人立ちする事になつたのですが、「一日も早く世間に出すやう」と力づけて下さつた巖谷先生には、もう此の晴着姿はお目にかけられません。それが返す／＼も心残りです。しかし、それは、皆さんが、これによく目をかけて下さる事によつて遠くから喜んでいただくかれませう。

昭和八年十一月

淵月しるす

目次

一茶の一生	……	一頁
いろは句	……	二頁
いろは句解	……	七頁
一茶はうたふ	……	六頁

一
茶
の
一
生

一茶の一生

第百十七代、後櫻町天皇の御代（徳川十代將軍家治の時）寶曆十三年五月五日、信濃國の北、柏原村（今の信越線の一驛）の百姓小林彌五兵衛の家に男の子が生まれました。名を彌太郎といふ。これが後に名高い俳人となつた一茶であります。

彌太郎が三歳の時、母はなくなりました。あとは、おばあさんが一しほ可愛がつて手にかけてくれました。漸く物心づいて來てから

『親のない子は、どこでも知れる。爪をくはへて、門に立つ。』と、子供等にからかはれて、母のないのが一層心細く、いつと

はなしに獨りぼつちの寂しさを味はひました。

我と来て遊べや親のない雀

これには、其の頃のたよりない姿があらはれてゐます。

彌太郎が八歳の時、父は二度目の妻を迎へました。十の時には仙六といふ腹違ひの弟が生まれました。それからいよくみぢめです。

繼母から、『子守の仕方が悪るいから仙六が泣くのだ、』といつては酷く叱られたり、少しの暇もなく追ひ使はれたり、のんびりした日とはありません。

まゝつ子や涼み仕事に藁叩く

その中で、いつも陰になり日向になり、彌太郎をかばつてくれ

たのはおばあさんでした。が、其のおばあさんは彌太郎が十四の秋になくなりました。それから一層みぢめでした。

おとうさんとても彌太郎を可愛がらぬはずは無いが、そこが思ふやうにならなかつたものと見えます。と云つて、此のまゝではすまされず、一時、家を離れた方がお互の爲にもならうと考へて、彌太郎を江戸へやる事にしました。十五の春と思はれます。

『しばらく辛抱してくれ、いゝか。毒な物食ふなよ。他人から悪くまれるなよ。そのうちに歸つて来て、まめな顔見せてくれ。』

おとうさんは、二里半ばかり送つたところで、かう云つて別れました。

江戸へ出てから、奉公先の苦勞をなめながら、それ／＼傳手を見つけて、俳諧、國學、漢學などの修業をしました。一茶の號は二十八歳の時には使つてゐました。三十歳の時から京都、大阪、四國、九州の旅をしながら、その地方々々の俳人と交り結び、三十三歳の時、江戸に歸りました。

三十九歳の、ひよつくり柏原に歸つて久しぶりで父を拜みました。一かどの見識のたつた我が子を見て父はどんなに喜んだ事でせう。けれども、繼母と仙六とは却つて邪魔扱ひです。その中を今日明日と暮すうちに、おとうさんは病氣にかゝり、五月二十一日に六十九歳でなくなりました。その時の一茶の日記があります。涙なしでは讀まれません。

おとうさんが、しきりに梨を食べたがるので、一茶は六里の道を山坂越えて善光寺(長野)まで急ぎ、青物屋から乾物屋まで一軒残らず捜しまはつたが、今とは違つて、時節はずれの梨は何處にもありません。『あゝ、昔支那には寒中に筍を堀り出した孝子さへあるものを、神や佛もお見捨てなされたか。父は定めし待ちこがれてゐなさらうに、何とお慰め申したらよからうか。』と心をいためながら力なく／＼夕方歸つて、『明日は越後の高田へ行つて、きつと捜して來ますから』と勵みをつけたのも、此の看病中の出來事です。

なくなるに先だつて、父からは『もう遠出をせず、早く嫁を迎へて家を立ててくれよ。』との遺言があつたけれど、其處には二

つの澁い顔が睨んでゐるので、さうもならず、復も寂しい一人旅をつゞけます。

その後、三度柏原へ歸つたけれど

雪の日や古郷人のぶあしらひ

古郷やよるもさはるも茨の花

といふ有様で、全く寄りつくすべもありません。

旅から旅のさすらひも、父に送られて家を出た時から、積り積つて三十六年、何か心に案ずるらしく一茶は冬枯の空に歸郷しました。

頭の白髪といひ、顔の皺といひ、げつそり齒の抜けた様子といひ、五十といふ歳にくらべては餘りのふけやう、皆旅の苦勞の跡

でありませう。一茶はともかくも柏原に借住居して腰をおろしました。仙六は少しも構ひつけません。

翌年になつても、仙六は父の遺言に従はないので、一茶もたうとうこらへかね、『よし、では江戸へ出て訴へるばかりだ。』と腹をたてたのを、他人のとりなしで漸く仙六が折れ、家屋敷、山林、田畑の一部を一茶に渡しました。

これから仙六親子と隣合せに、曲りなりにも自分の家におちつかれる身となりました。

もう此の頃の一茶の名は、かなり廣く知られて居ました。俳諧のお弟子も多く出来ました。世話する人があつたので、妻を迎へました。五十二歳の初聲です。五十四歳の四月、男の子が生

れました。喜ぶ間もなく翌月ころりとなくなりました。

それから後、生れた子供も子供も皆幼くてなくなり、妻には死に別れ、二度目の妻は離縁となり、六十三歳で迎へた三度目の妻の生む女の子の顔も見ず、文政十年十一月十九日、六十五歳でなくなりました。昭和元年から百年前です。

その亡くなる歳の夏の末には火事にさへ逢ひました。息をひきとつたのは、焼け残りの物置のやうな土蔵です。何處まで不運の一生でしたらう。

此の不運に磨きをかけられて、持つて生れた真直な心を大きくして、他の道にそれず、俳諧の一すぢに歩みをつゞけました。そこが一茶の一茶らしいところですよ。

言ひ傳へられた

信濃では月と佛とおらがそば

は一茶の句として廣く知られて居るやうです。昔から名高い姥捨の月、善光寺如來、更科蕎麥、その名は今も人の口にのぼるけれど、年々にいよゝその名の高まつてゆくのは此の句の主といはれる『俳人一茶』でせう。

い
ろ
は
句

いろは句

い 狗をぶらんどすなり花の蔭
ろ 六十年踊る夜もなく過しけり
は 這へ笑へ二つになるぞけさからは
に 人形の口へつけるや草の餅
ほ 螢よぶうしろにとまる螢かな
へ べつたりと蝶の善光寺平哉
と 蜻蛉の尻でなぶるや大井川
ち ちぐはぐにつつさす稻も青みけり

りりんくくと凧上りけり青田原
ぬぬかるみに尻もちつくなでかい蝶
る留守寺にせい出してさく櫻かな
を折々は腰たゝきつゝつむ茶哉
わ我にによくとて蜂のおせは哉
か門のてふ子が這へばとびはへばとぶ
よよわ蟲もばかにはならずあんな聲
た大根引大根で道ををしへけり
れ例年の雁も來て鳴く冬構
そそれそこは蟻の地獄ぞ這ふ毛蟲

つ連のない雁よ來よく宿かさん
ね猫の子がちよいと押へるおち葉哉
ななまけるな雀はをどる蝶はまふ
ら樂々と梅の伸びたる田舎哉
む村中にきげんとらるゝ蠶哉
ううまさうな雪やふうはりくくと
お居竝んで達摩も雛の仲間かな
の蚤の迹吹いて貰つてなく子哉
おおとなしく留守をしてゐる蝥
く栗拾ひねんくころり云ひながら

や やせ蛙まけるな一茶是に有り
ま 豆蒔や鼠の分も一つかみ
け けふからは日本の雁ぞ樂に寝よ
ふ 二つ三つ赤い木の葉のあら寒き
こ 來よ雲雀子のゐる藪が今もゆる
え 江戸風の朝からかぶりく哉
て 天からも降つたるやうなさくら哉
あ 有明や淺間の霧が膳をはふ
さ 猿も來よ桃太郎來よ草の餅
き きりくしやんとしてさく桔梗かな

ゆ 湯の中や人から人へとぶ小てふ
め めでたさも中位なりおらが春
み 湖をちよつと遊びしいなご哉
し 汁の實も蒔いておかれし畠ぞよ
ゑ 繪曆のはんじくらする禮者哉
ひ 人來たら蛙になれよ冷し瓜
も もたいなや晝寢して聞く田植歌
せ 蟬鳴くや天にひつつく筑摩川
す 雀の子そこのけく御馬が通る

いろは句解

いろは句解

い

狗をぶらんどすなり花の蔭

ぶらんど、ブランコの事、花の蔭で、ふらく肌ざはりのよい
風に吹かれながらの戯れ遊び、おまへも仲間に入れてやらうと
子犬を捕へて、そら此處へ腰をおろすのだ、此處へ手をかける
のだ、と教へてみても、思ふやうにならない。手をそへたまゝ揺
り動かしながら、きやつく大騒ぎです。

ろ 六十年踊る夜もなく過しけり

何處でも行はれる盆踊、もはや私も六十になつたがと、遂ぞのんびりした気分にもなり得ず、その踊の仲間入りもし得なかつた自分の生立をしみくと振り返つて眺めてゐます。

は 這へ笑へ二つになるぞけさからは

此の句の前書に『二つ子にいふ』とあります。

去年(文政元年五月)生れた女の子、物事に敏かれと祈る心から名も『さと』とつけ、手の中の玉のやうに撫でつさすりつ育てました。一茶の心では引き伸ばしたいばかりです。お誕生には

未だ五ヶ月もあるのに、這へ、笑へとあせつて居るのです。此の時一茶は五十七歳でした。

に 人形の口へつけるや草の餅

俳句には、『や』だの、『かな』だのが使はれて居ます。どちらも深く感じた時に使はれるので、一寸手軽にいふ事は出来ませんが、此の場合『おゝあの子は、人形の口へやつてゐるなあ、草餅を……』の『なあ』が『や』に當ります。

人形の口へ草餅、大概の女の子のやりさうな事で、思はず吹き出させられます。ともすると、今度は行水まで使はせてくれるのですから、人形の方がありがた過ぎて痛み入ります。

ほ 螢よふうしろにとまる螢かな

螢來い乳くれる、と呼びはやしなから、前ばかり眺めて行く子。供等の後へ、すうつと舞つて來た螢は草葉にとまつてびかありびかり。

へ べつたりと蝶の善光寺平哉

白、黄色、蝶でいろどられた善光寺平、善光寺平といふのは、今の長野市から見える千曲川をさしはさんだ兩岸一帯の平野です。今、春は盛りです。一茶が蝶をうたつた句は三百ばかりあります。それについては

蚊の句が二百九十ばかり、螢が二百二十餘、其の他、アリ、アブ、イトド、イナゴ、カマキリ、キリム、ス、ケムシ、ケラ、コホロギ、シヤクトリムシ、シミ、シラミ、セミ、タデノムシ、トンボ、ノミ、ハアリ、ハタオリムシ、ハタムシ、ハチ、バツタ、ハへ、ハジラミ、ヒトリムシ、ヘヒリムシ、ボウフラ、ミノムシ等合せると蟲ばかりで凡そ九百句、他の俳人は足もとへも寄りつかれません。

と 蜻蛉の尻でなぶるや大井川

なぶる一實は、ちよんくとお尻を水につき入れて卵を産むところですが、小さな蜻蛉と大きな大井川（静岡縣を流れる）、何といふすばらしい取り合はせでせう。

此の句は五十一歳の時『蜻蛉の尻でなふるや秋の草』でしたが、それが『蜻蛉の尻でなふるや角田川（東京灣へはいる隅田川）となほされ、十年も過ぎてから、蜻蛉の尻でなふるや大井川と改まつたのです。

ち

ちぐはぐにつつさす稲も青みけり

ちぐはぐ——不揃の事、成の長いのもあれば、短いのもあり、根の浅く植ゑられたのもあれば、深いのもあり、列も出たりは入つたりといふ不揃の苗が、一日二日とたつうちに、すつかり自然の元氣が出て一面の青田になつてしまつたと感心して居るのです。

り

りんくくと凧上りけり青田原

りんく、實にすばらしい勢です。此の勢に廣い空も全く凧に占領せられてしまひました。

ぬ

ぬかるみに尻もちつくなでかい蝶

アゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、又はカラスアゲハ何れにしても蝶類中の大形のもものが、しめり地に下りて水氣を吸ふ景色をよく見かけます。其のしめり地に下りかけた時、下翅の長くつき出たところ、ともすれば折れさうに弱々しく見えるところから『尻もちつくな』と氣づかつたところではす。

る 留守寺にせい出してさく櫻哉

櫻は、ほんの一盛です。其の櫻が時節が来れば、しんかんとした留守寺に、此の時だとばかり、精かぎり根かぎり自然のまゝに美しくしさの有りたけを盡して咲く姿、こんな氣高い姿は、さうやたらには見られません。

を 折々は腰たゝきつゝつむ茶哉

これは、一茶が五十六歳の三月の句です。此の月は、我が故郷の柏原には八日しか居らず、その餘はあちらこちらと歩きまはつて居ました。それに信州でも割合に寒い柏原には茶の木がな

かつたから、何處か他の地方の様子でせう。その前に、僧正が音頭とる也茶つみ唄といふ句もあります。茶を摘む人は、をりく腰をたゝいてそらす苦しさがありませんが、見て居る方からは長閑な一幅の畫です。

わ 我にによくとて蜂のおせは哉

おれに似ろ、おれに似ろといつて、自分の子でもない他の蟲の世話をする、それは偉いお世話を事だわい。と、えいやつと生きてゐる我が身にくらべて感心してゐるところです。

その『我に似よ』といふ蜂は、似蛾蜂、またムシヒキバチともい

ひます。青蟲や蜘蛛を自分の巢へ引きこんで、これに卵を産み添へておきます。卵からかへつた幼蟲は、その据膳の青蟲や蜘蛛を食物として大きくなり、蛹となり、ジガバチ——シヒキバチとなつて舞ひ出でます。うつかりすると、蜂の引きこんだ青蟲や蜘蛛が、親と同じやうな蜂になつたものと考へられるのです。それから此の仲間に土を塗つて巢を造るものもあるから土蜂ともいはれます。

支那の詩經といふ古い本に、ジガバチに拾はれたアナムシが、やがてジガバチになるといふ事がうたつてあり、やはり支那の揚子法言といふ書物にも

『死んだアナムシをジガバチが見つけて、おれに似ろ、おれ

に似ろと祈つておくと、しばらく過ぎればジガバチになる。』とやうに書いてあります。ドイツのフリードリヒ・リウツケルトは此の意味を取つてうたひました。

つち蜂は、小さな青蟲が

道にたふれてゐるのを見つけて

かあいさうな捨子と拾ひあげ

自分の巢の搖籃に運んだ

それから七日たつて

そのかあい、小蟲が

つち蜂とかはつて飛びまはるのを見た

お、つち蜂よ

おまへの子でないにしても
親なし子だと思へばいい
そして、大事に育ててやれ
さうすれば、まさか他人ぢやあるまい
たとへおまへの血は通はなくても
おまへの魂は中にあるだらう
だから、親として少しも恥づかしくは無いぢやないか。

か 門のてふ子が這へばとびはへばとぶ

田舎でなければ見られますまい。

『そら着物が汚れる。お手々が泥だらけ』と大概抱きあげられ

てしまいます。ところが、此の子は自然まかせです。門先をひ
よこくと四つ這ひです。目先に翅をたゝんだ蝶を見つけて、
目をくりくさせながら近づいて、かあいゝ手つきでつままう
とすると、蝶はひよいく二三尺舞つて止る。又ちよこく、
又ひよいく、實に長閑です。此の子は、一茶の妻菊女の遺し
た男の子です。

柿の葉や眞赤に成つて直にちる

も、よい句です。『直に』を『すぐに』と讀むと、時間が短くなつ
て柿の葉が色づくやいなや散つてしまふやうになりますから、
感じが違つてしまいます。

よ

よわ蟲もばかにはならずあんな聲

よわ蟲、クサヒバリ、カンタン、何處にもありふれたコホロギ、キリく、ス、何れにして秋に風情をそへるか弱い小さな音楽者が大勢居ます。目に見た姿は、蝶とは違って地味な装ひの者ばかり、しかも姿や形に似合はぬ美しくしい調べを聴かせます。

よい日やら蚤がをどるぞはねるぞよ

よい聲の蟲にはかり耳傾けた一茶ではない。『けふは日がよいといふのかな、えらい蚤がをどるぢやないか、はねるぢやないか』と自分まで幸福に恵まれさうな上機嫌です。

た

大根引大根で道ををしへけり

大根引、畑から大根を抜きたてること、通りすがりの人に、何處其處へ行くには如何行けばよいかと尋ねられた時、畑の中にかざんで居た人の腰がのびると、抜きたてた大根をつき出して『此の道をずうつと向うに行つて、そらあの森のところから右へ曲るだ』などと教へて居るところです。もう吐く息が白くなりました。頬被さへ見えませう。

れ

例年の雁も来て鳴く冬構

冬構、雪が来ても困らぬやうにと、冬にそなへる家の外圍など

の仕度です。それに取りかゝる頃となれば、いつもの通りなつかしい雁が鳴いておとづれる。いよ／＼これから雪の世界になるぞと、かはつて行く世の景色に、その雁をなつかしみながら張りつめた心持、信越線でも雪深い地方として名高い關山近くの柏原での句でせう。

柏原の雪深い事は

これがまあつひの栖か雪五尺

によくあらはれてみます。此の句は、一茶が久しい旅住居からはなれて、いよ／＼故郷柏原に、どしんと尻をおちつけた五十七歳の冬の作です。諸方をさまよつてみれば、住みよささうな場所には他にもあるが、やはり最後のおちつき所といへば生れた里

より他にはない。どう霞んでも空はいびつな狭い土地、冬ともなれば雪五尺とあきらめたところだ。

☐

それそこは蟻の地獄ぞ這ふ毛蟲

蟻の地獄、縁の下などに、土を櫛鉢形に掘り下げた小さな穴がよくあります。蟻やそのほか地の上を這ふ小蟲が、此の穴へ一歩ふみこむやずる／＼とすべる。這ひ上らうともがけばもがくほど、ずる／＼下へすべり落ちます。おまけに、穴の底から、ばつばと土を撥ねあげて、なほさらすべりこませ、いよ／＼底まで落ち入ると、底の土の中から姿も見せず獲物を挟む蟲があります。アリヂゴクの名も此處から出ました。地方によつては

ハツコともいひます。これはウスバカゲロウの幼蟲です。

□ 連のない雁よ来よく宿かさん

我と来て遊べや親のない雀には、こちらから頼みにする心持がありますけれど、『連のない雁よ』と呼びかけた此の句には『来よく』と重ねて強く呼びかけてゐるところに、しつかり自分のおちつきを見せてゐると共に、たよりのないものには直ぐに一切自分を投げ出して抱きとる温たかさを示してゐます。

釣鐘の中からわんと出る蚊かな
も、おもしろい句です。

□ ね 猫の子がちよいと押へるおち葉哉

箒が動いても、ちつとしては居られない子猫です。思ひがけない落葉がひらり、子猫の手はもう出てゐます。出るには出たが、その刹那に、これは獲物ぢやないといふ分別がついてゐるから、軽く手が出てゐます。『ちよいと』といふ柔かい言葉にびつたり其の感じが出てゐるのです。

□ な なまけるな雀はをどる蝶はまふ

寒いくといつてゐるうちに、いつしかもう春だ。うかくしでは居られない。さうかといつて一茶は、少しもあわてた風は

見せてゐません。此の時五十歳でした。その翌年

なまけるな蜻蛉赤く成る程に

其の翌々年は

なまけるな大麥小麥烏麥

とうたつてゐますが、どれも同じく調子に乗つてうたつた氣味
があります。それよりも

鳴く猫に赤ん目をして手まり哉

の方が面白いでせう。そばから手を出したさうな猫、どつこい
赤んべいと、身体を横へねぢむけて、『ほうやほけきよや鶯や』
と唄に合はせて毬つく小娘、その儘繪です。

ら 樂々と梅の伸びたる田舎哉

自分の家に住みこんで、妻を迎へた一茶は、秋のはじめに江戸
へ上つて跡始末をつけ、送別會まで受けて歸つた其の翌年の句
ですから、すつかりおちついて、樂々脚ふみのばした氣分です。

む 村中にきげんとらるゝ蠶哉

全く蠶の御機嫌をそこねぬやうに、下にもおかぬもてなしは、

『おかひこさま、おかひこさま』で

さまづけに育てられたる蠶哉

にも、よくあらはれてゐませう。

う

うまさうな雪やふうはりくと

これは後に、『うまさうな雪がふうはりふはり哉』と改められて
あります。讀めばすらくとうなづかれませう。他に『う』のつく
のは

牛の子の顔をつん出す椿かな

馬の耳ちよこくをなぶる蜻蛉哉

うらの山雪ござつたぞよはやくと

などがあります。

お

居竝んで達摩も雛の仲間かな

元の句は、『達摩の雛』とあるが、『の』字は書き違ひと考へて『達
摩も雛』と改めました。やさしい雛の仲間へ、目をくりくさ
せたでぶくの達摩さん。ほゝゑまされます。

の

蚤の迹吹いて貰つてなく子哉

これもよく見る事です。

蚤どもがさぞ夜永だろ淋しかろ

のゝさまと指した月出たりけり

も一茶の句らしいでせう。

お おとなしく留守をしてゐる蝨

一茶のきりくすをうたつた句は百餘あります。

出て行くぞ仲よく遊べきりくす

ともうたひました。きりくすはギスともいひます。あのチヨ
ン・ギースと鳴く蟲です。

御祭に赤い出立のトンぼ哉

これも『お』のつく句、秋祭の頃、澤山見かける赤蜻蛉、祭にふ
さはしい晴着と見たのが赤いいでたちです。

も一つ附け足します。

姥捨はあれに候とかゝし哉

姥捨は、月見の名所で名高い信濃更級郡の姥捨山です。その裾
の廣がりには千曲川を中にして善光寺平へ續いて居ます。もはや
稲は黄金の穂を垂れて、しゆうくくと風になびきながら豊年の
響きをあげて居ます。つんと両手を張つた案山子、姥捨山はあ
そこですよ』と指して月の名所を案内するらしい様子、全たく
世の中はおだやかですね。『あれに候』と謠のやうな口調であら
はされたところに、一層のんびりした気分があらはれて居ます。
これは、『さと女』の生れた歳の九月ですから、何となく満足し
たやうな心持まで窺はれて嬉しい句です。ついでに申しますが、

『かゝし』は『かゞし』ともいひますから。

く 栗拾ひねんくころり云ひながら

これは一茶六十歳の句、此の春男の子が生まれました。その子を背に、妻の菊女が栗拾ひの姿かも知れませんが。いや菊女は此の前、男の子を負うてゐるうちに、其の子の息をつまらせて死なせた不幸があつたから、一茶は案じて負はせなかつたかも知れません。何れにしても、山家の秋は物のみのる豊けさを思はせます。お子守しながらのんびり陽をあびての栗拾ひです。

草をつく石の凹みや暮遅き

暮遅き—暮れさうで暮れない日永、それは春です。うらゝかな

日かげを受けて、餘念もなく石の凹みに草をつく、かうしてのんびり育つ子供はどんなに幸福な事です。

草餅や片手は犬を撫でながら

これも捨てられません。定めしくりく太つた子供でせう。

や やせ蛙まけるな一茶是に有り

四月の事、蛙合戦を見に行つた時の句、場所は江戸の郊外でせう。負けるなよと力んで居る一茶が目に見えるやうです。一茶は一生瘦せても枯れても、『負けるな。おれは此處に居る』の氣で、ぐんぐん押し通してしまひました。

柳からもぐぐわと出る子哉

もゝんぐわは、『おばけ』と同じ事です。大概の子供は味を知つてゐませう。『やれうつな蠅が手をする足をする』は廣く知られた句。

ま 豆蒔や鼠の分も一つかみ

豆蒔―『福は内、鬼は外』とやる節分の豆蒔です。いよ／＼春にきりかはるほがらかな心持、忘れず鼠の分も一つかみ福は内、何といふありがたい心づかひでせう。

け けふからは日本の雁ぞ樂に寝よ

一茶は、よく日本を使ひました。二三擧げてみれば

日本の冬至も梅の咲きにけり

日本は這入口からさくらかな

日本の外ヶ濱迄おち穂哉

冬至といへば一年のうちで一番日の短い時、でも暖かに梅が咲くし、花の中の花としたはれる櫻は、國中何處へ行つても春をかざるし、豊かな年のみのは遠い海邊まで稲の落穂に知られるといふやうに、どれもこれも日本のありがたいところあらはれてゐます。

ふ 一二三赤い木の葉のあら寒き

二三回、五六回、靜かに味はつてごらんなさい。澄みきつた秋

の氣が身にしみて來ませう。

こ 來よ雲雀子のゐる藪が今もゆる

一茶が五十歳の時

おりよく野火が付いたぞ鳴雲雀

とうたつたのと同じ目のつけどころ、それから十年過ぎて『來よ雲雀』となつたものです。一茶は鳥にでも蟲にでも、すぐ呼びかけてものを言つてゐます。

『こ』のつく句

子は軒親は藁うつ夏の月

といふのががあるが、こんな場合『まゝつ子や涼み仕事に藁叩く』

であつた自分とくらべて、どんなに其の子の幸福を喜んで居た事でせう。

え 江戸風の朝からかぶりく哉

江戸風—四角な風です。かぶりくは『いやだく』と首をふる形、どうも風が強すぎてか朝から機嫌が悪るい。も少し無理をすれば風のひつくり返る事はおきまりです。

て 天からも降つたるやうなさくら哉

天からも降つた—何といふすばらしい櫻でせう。これは六十四歳の時の句ですが、前の六十歳の春

天からでも降つたるやうに櫻かな
とうたつてゐます。此の二つを並べて、その様子をくらべてご
らんなさい。

あ 有明や浅間の霧が膳をはふ

有明一月が空にあるうちに、しら／＼と明けかゝる時です。こ
れは五十歳の七月の句ですが、一茶は先月江戸から歸りに、秋
立つことも早い信濃の輕井澤を過ぎ、浅間の麓ともいつてよい
田中の宿に泊つて居ますから、大方その夜明の朝飯の時の景色
を思ひ浮かべたのでせう。「あ」のつく句、
あの月を取つてくれろと泣く子哉

蛇一つ晝寢起して廻るなり
殊に蛇の晝寢起しは物騒でたまりません。

さ 猿も來よ桃太郎來よ草の餅

元の句「狙も來よ桃太郎來よ艸の餅」の狙と艸とを普通に使はれ
る猿と草とにかへました。
鬼が島征伐の桃太郎の家です。犬も雉も居るはずです。氣のよ
いお爺さんとお婆さんが草餅をこしらへたところなんです。い
ゝえ、お爺さんも、お婆さんも、桃太郎も、犬も、雉も居なく
てもいいのです。出來上つた草餅を見て興じてゐるところです。

き

きりくしやんとしてさく桔梗かな

すつきりと伸びあがつた莖の先に、ひきしまつた、おちつきのあ
る、みづぎはだつた花をつけた桔梗の姿がよくあらはれてゐま
す。

一茶が十三歳の時、七十餘歳でなくなつた加賀の國の千代女の
句に

桔梗の花咲く時ほんと言ひさうな

といふのがありますが、いかにも女らしいやさしい句です。

ゆ

湯の中や人から人へとぶ小てふ

信濃の北、信越線驛の豊野から四里半程離れたところに、湯田
中といふ温泉場があります。前には星川の流をひかへ、西南方
には遠く戸隠、妙高、黒姫の山々を望むよい所で、今では入湯
客を迎へる旅館さへ十餘軒もあるひらけ方ですが、一茶の頃は、
『田中河原といふ所は、田のくろ、さては石の下から温かい湯
がむくむくと湧き出て、むだに流れ散つてしまふ。』

とはいふものの、まるで目にかけないわけではありません。

『貧亡な者が子を育てるには、湯の涌くところにまさるところ
はあるまい。夜がほのくくと明けて、鳥ががあと鳴くと一諸に

がばとはね起きて、十ばかりの子を頭として、兄は弟を背負ひ、姉は妹を抱きながら、寢床を出て、呼びあひく、其處からこゝからも、走りく、自然に涌き出た湯の中に飛びこんで、きやつきやつと大騒ぎだ。いま雪にとちこめられた冬の眞盛だが、此處では丸裸で、狂ひ遊んで、むくく大きくなるのだから、どの子供にも自然と病はなく、太くたくましく見える。親々からいつても、寒からうと着物の心配のないだけでも大助かりである。』

と一茶は語ります。

子どもらが雪喰ひながら湯治かな
湯上りや裸足でもどる雪の上

もなるほどとうなづかれませう。

これが春なら

湯の中や人から人へとぶ小てふ

でせう。夏なら

石原や螢かき分けて湯につかる

です。草かき分けてといふところを、『螢かき分けて』です。ぼろぼろこぼれる螢は舞ひたつてイルミネーションです。

めでたさも中位なりおらが春

これは一茶が五十七歳正月の句ですから、さと女の生れた翌年で、娘に雑煮の膳をすゑて、『這へ笑へ二つになるぞけさからは』

とうたつたその日の作です。おれの春、とても上とはいへない。まづ中位おめでたいぞ、といふあきらめ、それ以上の安心、むしろ誇さへ感じてゐるらしいでせう。

〔み〕 湖をちよつと遊ぎしいなご哉

これより前の句に

なぐさみに蝨のおよぐ湖水哉

といふのがあります。此の句の生れがはりでせう。『ちよつと』といふところに慰み心地があらはれてゐます。

『み』のつく句に

みぞ川をおぶさつて飛ぶいなご哉

湖に尻を吹かせて蟬の鳴く

といふのがあります。一方は小さいところに目をつけてゐます。それにひきかへて、後のは、とても大きな背景です。『蜻蛉の尻でなぶるや大井川』に似たおもむきがあります。

〔し〕 汁の實も蒔いておかれし畠ぞよ

母に代つて、陰になり日向になり、三つの時から十四の歳まで老の身を忘れて自分を可愛がつてくれたおばあさんを思ひ出したのです。汁の實まで蒔いておいて下されたあの畠、さう思ふと、おばあさんの姿がありくと見えます。彌太郎と呼ぶやさしい聲まで聞えます。一茶は今五十歳、子供のやうな心持で、

目からはほとく涙を流して居ます。

系 繪曆のはんじくらする禮者哉

『・』で一月二月、月の大小を刀の大きい小さいであらはずといふやうに、月々の重なる行事まで繪で示した文字の讀めな人の爲にこしらへた曆を、『新年の御慶申しあげます』と年の始めの挨拶に來た人々が寄り合つて、『かうだ』『いや、あゝだらう』と判斷してゐるところ、初春らしいのどけさです。

ひ 人來たら蛙になれよ冷し瓜

食べる前に清水に冷した瓜、もし人が來たら、蛙に化けてうま

く逃れろといふのです。その色から形から、どこやら蛙に似たところもおもしろいし、涼しさに加へて美しくしさのあらはれてゐるところなど、實に忘れられない句ですが、これより九年前に

冷し瓜二日たてども誰も來ぬ

といふ下地がちゃんと出來てゐたのです。二日も冷しぬかれた瓜、色の鮮やかさと共に、涼しさがたゞよつて來ます。

も もたいなや晝寢して聞く田植歌

もとが農家育ちだけに、田畑の苦勞をよく知つてゐます。そこで今の我が身をかへりみて、『あゝ、もつたないなあ』と腹か

ら出て来たのです。此の句は寛政七年の作と思はれますから、さうすると三十三の時です。

せ 蟬鳴くや天にひつつく筑摩川

それより前に

蟬鳴くや空にひつつく最上川

といふのがあります。それを後に作りかへたのです。夏目成美といふ江戸の俳人は、筑摩川の句を評して、『炎熱目に見える様だ。』と、ほめて居ります。此の句は大方アブラゼミでせう。『じわ〜と煮ゆるやうなり油蟬』と云はれた通り、たゞさへ聞いてむし熱いその蟬の合奏があたりをこめた善光寺平の、中をつ

らぬく筑摩川―千曲川が、すうつと遠く消えて天と一色にぬりつぶされた―遮る物も無い白日の下の大らかな景色、なるほど『炎熱、目に見えるやう』といふより他はありません。

す 雀の子そこのけ〜御馬が通る

もう廣く知られた句の一つでせう。

雀子や牛にも馬にも踏まれずに

はそれより後の句です。一茶は本當に雀が好きでした。自分が食べる爲に手に入れたお米さへ、すつかり雀にやつてしまつたお話しへ残つて居ます。

どうですか。かう讀んで来て、一茶といふ人が、なつかしくな
りはしませんか。さうなれば、一茶の心持がわかつて来たので
す。そこでも一度、又一度、くり返して味はつてごらんなさい。
いよ／＼なつかし味は深くなり、なほ／＼あなたの『うるほひ
心』が養はれて行きますから。

一茶はうたふ

一茶はうたふ

仲間はづれて

納屋のかけ

柿の若葉が

目にいたや

獨り、しよんぼり

○ 我と來て遊べや親のない雀

子守りやいばりに

背はぬれる

晝寝のひまが

蚤ひろひ

首をうなだれ

まゝつ子や涼み仕事に藁叩く

○
まめで戻れと

見おくられ

十年あまりの

旅のそら

すい〜のびて

春たつや彌太郎改め一茶坊

こがれて歸る

○
麥の秋

仲よく暮らせ

おさらばと

それが名残の

父ありてあけぼの見たし青田原

○
しぶい顔より

いばらより

しばらく頼む

世のなさけ
値ぶみされても

○
瘦蛙負けるな一茶是に有り

○
のほゝん相な
ふくろふが
くすく笑ふ
破れぶすま
假の庵で

餅つきや今それがしも故郷入

○
まめ息災の

ころもがへ

水祝はれて

五十聲

なごむ我が家に

○
百も生きん夕顔棚の下住居

○
頭巾すがたよ

ひるき目に

見てさへ寒い

そのそぶり
老をわすれて

○ 這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

手うちあはゝに

頭てんく

しやぶつて捨てる

かざぐるま

千の倉より

○ 蚤の跡吹いて貫つてなく子哉

玉は玉かや

眞白玉

撫でつさすりつ

いとしがる

玉はほろりと

○ 露の世は露の世ながらさりながら

つひの栖ぞ

ほたる火も

あませばいやはや

これははや

けろり眺める

燒跡やほかりくくと蚤騷ぐ

○

此處は信濃の

柏原

主なつかし

石碑の

文字はあざやか

松かげに寝てくふ六十餘州かな

昭和八年十二月八日印刷
昭和八年十二月十日發行

定價金貳拾五錢

著者 前 澤 淵 月

長野縣下伊那郡飯田町一七七番地

發行者 山 村 正 夫

長野縣下伊那郡上飯田町四五五番地

印刷者 原 田 増 藏

長野縣下伊那郡上飯田町四五三番地

印刷所 研 究 社

不許
複製

發行所

長野縣飯田傳馬町
振替長野六二〇八番
電話飯田二六七番

山村書院

終



山村書院版